

Research into Japanese Ability: The Case of Students at Toyohashi University of Technology —— Junior High School Level Kanji Ability

Yoko Yamada

It is said that there has been a decline in the scholastic ability of university students in Japan, and the Japanese ability of those students today has declined as well. With this in mind, Nakamori and Yamada conducted research into the ability of students at Toyohashi University of Technology to read and write kanji in 2005. And we announced the results in the article.

Therefore, we strongly felt the necessity to conduct research into the Japanese ability of students including kanji ability. So we conducted research on the ability of students at Toyohashi University of Technology to read and write kanji, proverbs, honorifics, kanji idioms, kanji radical identification, kanji stroke order, etc in 2006.

The results of this research are presented in this bulletin and are divided into four separate article.

The authors of these and the topics are as follows:

General Remarks: Yasuyuki Nakamori

Junior High School Level Kanji Ability: Yoko Yamada

Proverbs, Kanji Idioms, and Kanji Radical Identification, etc: Hironobu Hibino

Honorifics, Kanji Stroke Order, etc: Yuko Suzuki

大学生の日本語能力の現状・各論（中学生程度の漢字） —豊橋技術科学大学生の場合—

山 田 陽 子

はじめに

平成 17 年度、「日本語法」受講者を対象として、小学 3 年生から中学校で習う漢字の能力調査を行い、結果報告とその分析を行った。¹ 調査では、「読み」と「書き」を記述式で出題し、正答率は、全体（読み＋書き）が、小学校で習う漢字 71.5%、中学校で習う漢字 57.8%であった。「読み」については、小学校で習う漢字 95.0%、中学校で習う漢字 76.0%であり、「書き」に至っては、小学校で習う漢字 55.0%、中学校で習う漢字 39.6%という結果となった。

さらに、答案を分析した結果、「語彙力」と「正確に書く能力」が不足していることが判明した。前者は、単に漢字を知らない、書けないという問題ではなく、言葉そのものを知らないということである。後者は、きちんと正確に書こうとする意志、きちんと書くことに対する価値観の低下である。

さてその調査を受けて、平成 18 年度は、調査範囲を広げ、ことわざ・慣用句・四字熟語・敬語・表現などについて、記述問題・選択問題を含めて 6 回にわたって「日本語能力調査」を行い、最後に期末試験として総合問題を出題した。総合問題は、全 6 回の調査で既出の問題を約 60%、新出問題を約 40%出題した。

本稿はそのうちの第 1 回「中学生程度の漢字①」、第 2 回「中学生程度の漢字②」についての報告と考察である。

今回の調査では、前回の調査結果をふまえ、漢字の読み・書きの記述のみではなく、選択も加えての出題形式とした。

まず、中学生程度の漢字①では、中学校の 1 年程度の新出漢字と、小学校の学習漢字ではある

¹ 中森康之・山田陽子「大学生の漢字能力の現状——豊橋技術科学大学生の場合」（『雲雀野』28 号，2006 年 3 月）

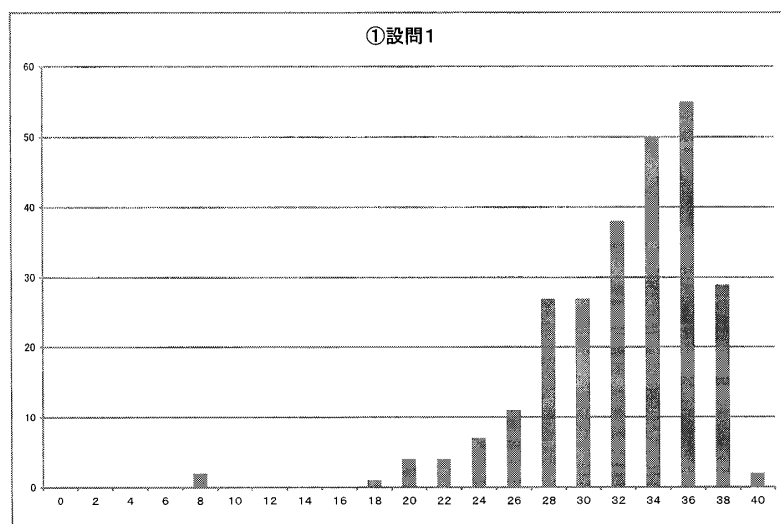
がその音訓の残りを中学校で学習するもの（新出音訓）を中心に、次に中学生程度の漢字②では、中学校3年間で学習する常用漢字を中心に出題した。出題形式は、①、②とも、

一 読み	選択 5 問	記述 15 問	計 20 問
二 書き	選択し記述		10 問
三 書き	誤りの抜き出しと訂正の記述		5 問
四 書き	記述		15 問

の合計 50 問とし、配点は各 2 点で、100 点満点である。

I 中学生程度の漢字①

1 読み



40 点満点で、最高点 40 点、最低点 8 点、平均点 32.4 点、正答率 81.0%である。分布が右よりであり、読みについては正答率も高めだということが分かる。

(1) 読み（選択）の誤答について

前回の記述調査で誤答率の高かった読みを選択問題とし、a～dの選択肢には、前回の調査での誤答の中で多かったものを3つ使用した。選択問題としても誤答の多かったものは、以下の通りである。

・「彼女は新しい小説を著（あらわ）した」の誤答は 87.1%（前回 93.0%）

a 「ちよした」 27.3%（前回 28.3%）

b 「しるした」 56.6%（前回 50.0%）

c 「いちじるした」 3.1%（前回 2.6%）

d 「あらわした」 12.9%

・「湖に臨（のぞ）んだ静かなホテルだ」の誤答は 21.1%（前回 23.2%）

- a 「のぞんだ」 78.9%
- b 「たたずんだ」 18.0% (前回 5.1%)
- c 「いどんだ」 1.6% (前回 6.6%)
- d 「ちなんだ」 1.6%

・「机上（きじょう）」にノートと教科書を置く」の誤答は 23.8% (前回 22.8%)

- a 「たくじょう」 18.4% (前回 12.9%)
- b 「きじょう」 76.2%
- c 「つくえじょう」 1.6%
- d 「ばんじょう」 3.9%

前回は記述問題だったため、無解答（「著した」8.5%、「臨んだ」5.5%、「机上」3.7%）があったが、今回は無解答がないにもかかわらず、誤答率にそれほど大きな差はない。記述の際には思いつかず無解答だったのが、選択の際にはとりあえず選んでみたものの、確信を持って選んだわけではないということなのだろう。選択問題でも正解しないということは、これらの単語を知らないということになる。語彙の少なさは気がかりである。

(2) 読み（記述）の誤答について

誤答の中で多かったのは以下の通りである。

・「まことに厳（おごそ）か極まりない儀式」の「厳か」の誤答は 29.7%

- | | |
|-------------|-------------|
| 「いささか」 3.1% | 「げん」 1.6% |
| 「しめやか」 1.6% | 「きびしか」 1.2% |
| 「おろか」 1.2% | その他 8.2% |

・「江戸の敵（かたき）を長崎で討つ」の「敵」の誤答は 61.7%

- | | |
|------------|-----------|
| 「てき」 60.5% | 表記ミス 1.2% |
|------------|-----------|

・「いつも非難の矢面（やおもて）に立つ」の「矢面」の誤答は 38.3%

- | | |
|-------------|------------|
| 「やめん」 11.3% | 「やづら」 3.9% |
| 「やおも」 2.7% | 「しめん」 2.0% |
| 「やさき」 1.6% | 「やつら」 1.2% |
| 「やもて」 1.2% | 「まと」 1.2% |
| その他 5.9% | 無解答 7.4% |

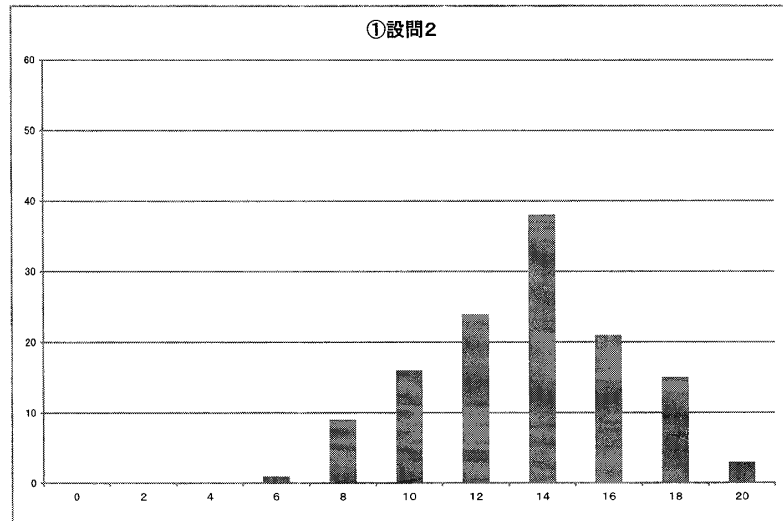
「厳か」の場合、「か」という送り仮名があるのだから訓読みのはずである。「げん」という音読みはあり得ない。「きびしい」と読む場合は「厳しい」となり、送り仮名は「しい」であるため、「厳か」は「きびか」となり、「きびしか」にはならない。又、「いささか」「げん」「しめやか」「きびしか」「おろか」では文意が通らない。文中での意味を考えるとなく、単語だけを見て読んでいるのかもしれない。

「敵」という漢字はたしかに「てき」と読む。しかし「江戸の敵を長崎で討つ」はことわざで

ある。「てき」と読んでしまうのは、このことわざを知らないか、全体を見ずに漢字だけを読んだということになる。いずれにしても、このことわざの意味は、きっと分からないのだろう。

「矢面」も漢字そのものは決して難しいわけではない。簡単な漢字でも訓読みは苦手だとも言えるし、この言葉そのものを知らないのかもしれない。

2 書き（選択し記述）



前回の記述調査では、熟語としては意味の通らない漢字を組み合わせた造語がいくつも記された。そこで今回は、4つの選択肢から漢字を選択して記述する問題を出題してみた。

20点満点で、最高点20点、最低点6点、平均点13.1点、正答率65.5%である。「読み」に比べると正答率も下がり、分布が左に移ってきていることが分かる。

誤答の中で多かったのは以下の通りである。

・「コウガク（後学）のために聞く」の誤答は31.4%

ただし、漢字の記述ミスを含むと誤答は60.8%

「工学」	3.1%	「光学」	0%
「向学」	27.8%	「後学」	68.6%
無解答	0.4%		

「後学」を選択した68.6%の中には、記述の際の漢字ミスが29.4%含まれるので、正解者は39.2%

・「絵のセイサク（制作）に没頭する」の誤答は66.3%

ただし、漢字の記述ミスを含むと誤答は82.7%

「制作」	33.7%	「製作」	64.3%
「成作」	2.0%	「正作」	0%

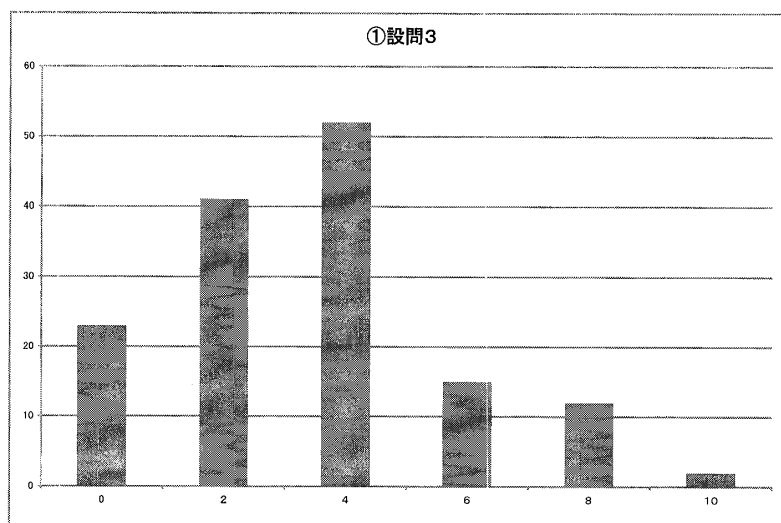
「制作」を選択した33.7%の中には、記述の際の漢字ミスが16.5%含まれるので、正解者は17.3%

ここでの誤答には、漢字の選択そのものを誤っている場合と、漢字の選択は正しくても、漢字の記述に問題のある場合の2通りある。記述のミスを含めると、誤答率は大幅にアップする。選択肢の中に漢字が記されているにもかかわらず、正確な漢字が記せないのは、どういうことだろうか。例えば、「後学」の「後」では、4, 5, 6画目が1画で記されているもの、「学」の7画目のはねていないもの、「制作」の「制」の5, 8画目のはねていないもの、「作」の3, 4画目が1画で記されているものなどである。

漢字の画数に関しては、他にも「維持」の「維」の「糸」1, 2, 3画目を1画で記したり、「佳」の3, 5画目を1画で記したり、「追求」の「求」の5, 6画目を1画で記したり、「首席」の「席」の5, 7画目が1画で記されているものが多く見られた。又、ハネに関しては「恩恵」の「恵」の「心」の2画目をはねていなかったり、「拒否」の「拒」の「てへん」の2画目をはねていないものが多かった。

「学」「糸」は小学1年生、「後」「作」「心」は小学2年生、「求」「席」は小学4年生、「制」は小学5年生の配当漢字、「維」「拒」は常用漢字である。

3 書き（誤りの抜き出しと訂正の記述）



前回の記述調査では、熟語としてあり得ない漢字を組み合わせた造語多く記されていた。そこでここでは、わざと文中に誤った漢字を記し、その誤った漢字を抜き出し、訂正する問題を出題してみた。

10点満点で、最高点10点、最低点0点、平均点3.5点、正答率35.0%である。高得点者が減り、低得点者の割合が非常に高い。0点が全体の9.0%を占めている。「読み」「書き（選択し記述）」に比べて分布がかなり左に偏っていることが分かる。

誤答の中で多かったのは以下の通りである。

・「利用者の便宜を図る」（宜→宜）の誤答は82.0%

便→更

2.0%

宜→イ+宜

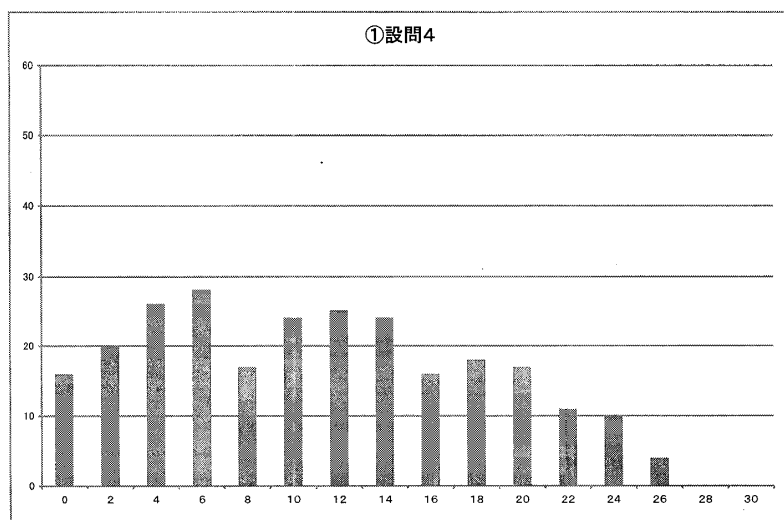
6.6%

宜→他の漢字	9.4%	宜→ナシ	13.7%
囙→計	13.7%	囙→測	2.7%
囙→謀	2.3%	囙→ナシ	2.3%
囙→他の漢字	2.0%	その他	0.8%
表記ミス	3.1%	無解答	23.4%

「便宜」という熟語を知らなかったのか、「宜」ではなく、「便」や「囙」を抜き出した解答が多かったのには驚いた。とりあえず漢字は抜き出したものの、訂正した漢字を記していないものが16.0（13.7%+2.3%）%、無解答が23.4%と高くなっている。

他にも、「乾燥（燥→燥）」を「燥→操・イ+旁」、「水曹（曹→槽）」を「曹→漕」と記した解答が見られた。やはり、熟語の意味を考えずに漢字を記しているようである。

4 書き（記述）



「書き」の記述の誤答は、筆順通りにチェックし、誤りの見つかった時点で誤答とした。そのため、本来複数箇所誤りのある漢字も、最初に誤りをチェックした箇所分類している。

30点満点で、最高点26点、最低点0点、平均点11.1点、正答率37.0%である。高得点者が減り、点数にばらつきが見られる。「読み」「書き（選択し記述）」「書き（誤りの抜き出しと訂正の記述）」に比べて分布が全体に広がっていることが分かる。

誤答の中で多かったのは以下の通りである。

・「コドク（孤独）な毎日」の「孤」の誤答は84.0%

⑪ 9画目をはねているもの	24.2%
⑩ 8画目が記されていないもの	14.5%
⑦ 6, 7, 8画目が「ム」と記されているもの	10.2%
② 「狐」	9.4%
⑤ 子偏+脈の旁	2.7%

③「弧」	2.3%
⑨ 4画目と6画目がはなれているもの	2.3%
①「個」	2.3%
⑥子偏+机の旁	2.0%
⑧ 6, 7, 8画目が「山」と記されているもの	1.6%
④ 2画目をはねていないもの	1.6%
その他	5.1%
無解答	5.9%

・「部屋がアタタマル（暖まる）」の「暖まる」の誤答は68.0%

「温まる」	41.0%	偏が「目」のもの	11.3%
「温る」	2.0%	「温たまる」	1.6%
その他	5.9%	表記ミス	3.5%
無解答	2.7%		

「孤」の誤答は次のように分類することが出来る。

無解答	5.9%
①「個」のように全く異なる漢字	2.3%
②「狐」、③「弧」のように偏の異なるもの	11.7%
④のような偏の表記ミス	1.6%
⑤、⑥のような旁の異なるもの	4.7%
⑦、⑧のような旁の部分の異なるもの	11.8%
⑨、⑩、⑪のような旁の表記ミス	41.0%

偏と旁の表記ミスを加えると、42.6%となり、誤答84.0%の半分以上を占めている。つまり、おおよその漢字の形は覚えていても細部はいい加減だということがわかる。

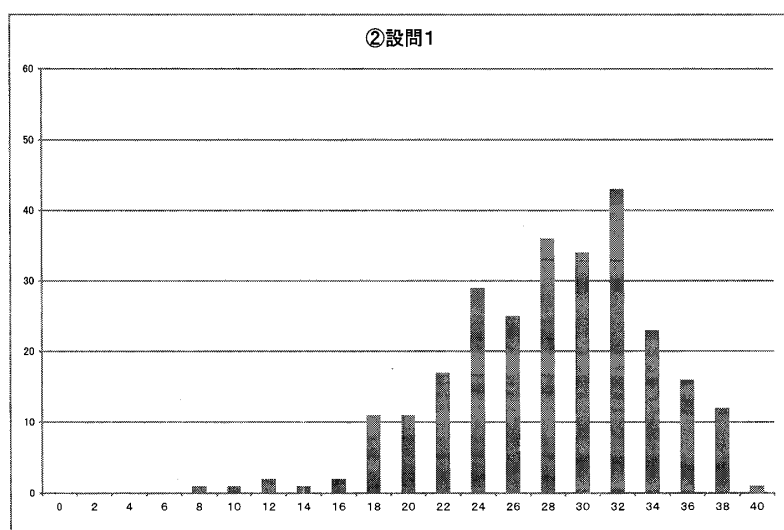
「暖まる」の誤答68.0%のうち、「暖」ではなく「温」を記したものが44.6%を占めている。「暖」が日のあたたかさ、「温」が水分のあたたかさを表すという漢字の基本の意味を理解していないようである。

他にも、「煙突」の「煙」を「円」としたものの、「菓子」の「菓」の「果」を「田+木」としたものの、「鑑定」の「鑑」の「臣」を「巨」としたものの、「遅れる」の「遅」の「羊」の横画が1本足りないものといった解答があった。同音の漢字を書き誤るというだけでなく、漢字そのものを正確に覚えていないということのようである。

「暖」は小学6年生の配当漢字、「孤」「菓」「鑑」「遅」は常用漢字である。

Ⅱ 中学生程度の漢字②

1 読み



40点満点で、最高点40点、最低点10点、平均点28.3点、正答率70.8%である。「中学生程度の漢字①」の「読み」（グラフ ①設問1）に比べて正答率は下がり、分布が広がっていることが分かる。

（1）読み（選択）の誤答について

前回の記述調査で誤答率の高かった読みを選択問題とし、a～dの選択肢には、前回の調査での誤答の中で多かったものを3つ使用した。選択問題にすることによって記述よりは誤答率が下がったものの、やはり誤答の多かったものは以下の通りである。

・「政府の枢軸（すうじく）として活躍する」の誤答は30.3%（前回41.2%）

- a「きじく」 10.5%（前回 4.8%）
- b「くじく」 6.4%（前回 20.2%）
- c「すうじく」 69.7%（前回 58.8%）
- d「ちゅうじく」 13.5%（前回 8.1%）

・「源氏の嫡男（ちゃくなん）として生まれる」の誤答は26.2%（前回57.0%）

- a「ちゃくなん」 73.8%（前回 43.0%）
- b「てきなん」 5.2%（前回 5.9%）
- c「てきお」 1.1%（前回 1.8%）
- d「ちゃくし」 19.9%（前回 2.2%）

前回の記述の際には、「枢軸」では3.3%、「嫡男」では23.9%の無解答があったが、今回は選択肢があるためか無解答はないし、誤答率も下がっている。音としてあり得そうな、あるいは耳にしたことのある音を思い出して選択し、誤答が少なくなっているのかもしれない。

しかし、記述の際には「くじく」「ちゅうじく」「きじく」の順に誤答の多かった「枢軸」の読みが、選択では「ちゅうじく」「きじく」「くじく」の順となり、「てきなん」「ちゃくし」「てきお」の順だった「嫡男」の読みが「ちゃくし」「てきなん」「てきお」の順に変わっているのはなぜだ

ろうか。

(2) 読み（記述）の誤答について

誤答の中で多かったのは以下の通りである。

- ・「その苦衷（くちゅう）は察するに余りがある」の「苦衷」の誤答は 81.3%

「くせつ」	9.4%	「くも」	7.9%
「くあい」	6.4%	「くい」	3.0%
「くしょう」	3.0%	「くり」	2.6%
「くそう」	2.2%	「くし」	1.9%
「く」	1.9%	その他	23.2%
無解答	19.9%		

- ・「板塀（いたべい）をめぐらした古い邸宅」の「板塀」の誤答は 83.5%

「いたぼり」	16.1%	「ばんへい」	16.1%
「ばんぺい」	9.7%	「いたへい」	4.1%
「ばんへき」	3.0%	「はんぺい」	1.9%
「ばんべい」	1.9%	「いたがき」	1.9%
その他	16.5%	無解答	12.4%

- ・「抄本（しょうほん）ではなく謄本が必要だ」の「抄本」の誤答は 62.2%

「さほん」	15.4%	「しゃほん」	9.7%
「みょうほん」	7.5%	「さほん」	2.6%
「たくほん」	2.2%	その他	12.4%
無解答	12.4%		

- ・「抄本ではなく謄本（とうほん）が必要だ」の「謄本」の誤答は 60.3%

「しょうほん」	4.9%	「ぜんぼん」	4.5%
「ぜんほん」	3.7%	「よほん」	2.6%
「ぜんぼん」	2.2%	「かつぼん」	1.9%
その他	17.2%	無解答	23.2%

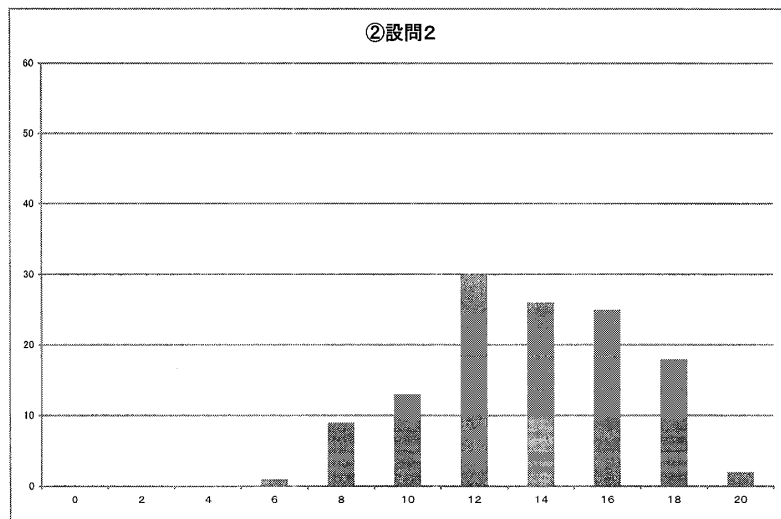
ここでは、無解答の割合が高くなり、誤答にばらつきが見られるようになってきた。

「苦衷」の「衷」を何とか読もうとの努力（？）はうかがえるが、「苦衷を察する」経験はないのかもしれない。それにしても、「板塀」のある家が少なくなったとはいえ、「いたぼり」や「ばんぺい」では意味が通らないし、「抄本」や「謄本」という漢字を知らずに社会生活を営んで大丈夫なのか心配になってしまう。

また、「宰相（さいしょう）」を「さいそう」「ざいしょう」「ざいそう」と読んだり、「片言隻語（せきご）」を「しゅうご」「へきご」「しょうご」と読んでいる解答もあった。「宰相」という漢字を知らないということは、世の中の問題に無関心ということにもなるし、「片言隻語」とい

う四字熟語も知らないということなのかもしれない。

2 書き（選択し記述）



前回の記述調査で誤答率の高かった漢字を、4つの選択肢から選択して記述する問題とした。選択肢には、前回の調査での誤答を3つ用いた。

20点満点で、最高点20点、最低点6点、平均点13.6点、正答率68.0%である。「中学生程度の漢字①」の「書き（選択し記述）」（グラフ ①設問2）と比べると、正答率にはさほど差はないものの、分布がなだらかになっていることが分かる。

誤答の多かったものは以下の通りである。

- ・「意味シンチョウ（深長）な会話だ」の「深長」の誤答は66.7%（前回81.6%）

ただし、漢字の記述ミスを含むと誤答は80.9%

「慎重」	15.4%	「深長」	33.3%
「深重」	50.6%	「慎長」	0.7%

「深長」を選択した33.3%の中には、記述の際の漢字ミスが14.2%含まれているので、正解者は19.1%

- ・「話がカキョウ（佳境）に入る」の「佳境」の誤答は40.8%（前回88.9%）

ただし、漢字の記述ミスを含むと誤答は63.3%

「架橋」	4.5%	「過境」	34.1%
「佳境」	59.2%	「華僑」	0.2%
その他	1.5%		

「佳境」を選択した59.2%の中には、記述の際の漢字ミスが22.5%含まれているので、正解者は36.7%

ここでも、漢字の選択は正しくても記述に問題のある解答が多く見られた。「深長」の「深」の5画目をはねていないもの、7画目をとめずにはらっているもの、「佳境」の「境」の13画目

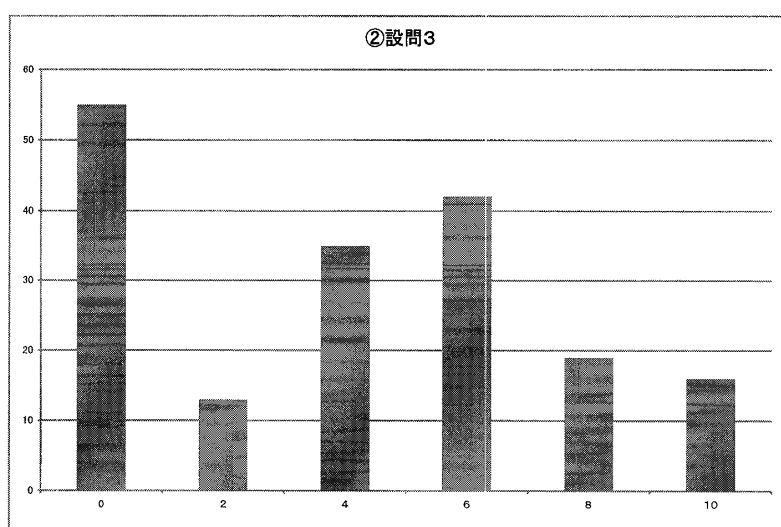
と 14 画目が同じ所から書き出されているものなどである。

「深長」の記述も含めての正解者は 19.1%である。前回の記述問題でも正解者は 18.4%なので、選択肢があってもなくてもさほど差のないことがわかる。「意味深長」という四字熟語を知らないことも問題だが、選択肢があるにもかかわらず正確な漢字が書けないということも問題である。

その他にも、「週刊誌」の「刊」の「干」が「千」となっていたり、「誌」の「士」が「土」になっているものもあった。いずれの漢字も決して難しい漢字とは言えない。

「深」は小学 3 年生、「境」「刊」は小学 5 年生、「誌」は小学 6 年生の配当漢字である。

3 書き（誤りの抜き出しと訂正の記述）



文中の誤った漢字を抜き出し、訂正する問題である。

10 点満点で、最高点 10 点、最低点 0 点、平均点 4.6 点、正答率 46.0%である。「中学生程度の漢字①」の「書き（誤りの抜き出しと訂正の記述）」（グラフ ①設問 3）と比べると、正答率は高くなっているものの 0 点の割合が 20.2%と非常に高く、分布も異なっている。

誤答の中で多かったのは以下の通りである。

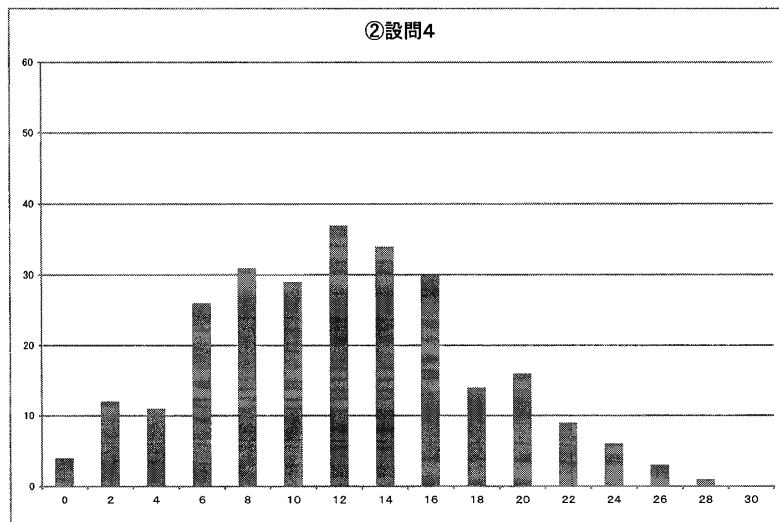
・「今年の夏はとにかく厚い」（厚→暑）の誤答は 57.7%

厚→熱	21.0%
片方にのみ送り仮名の「い」の記してあるもの	13.1%
厚→ナシ	1.9%
その他	3.0%
表記ミス	18.0%
無解答	0.7%

「厚」を「熱」に訂正（？）することの予想は出来たが、「暑」を「目+者」や「日+土+ノ+目」と記すというのは予想外だった。問題文中に記してある「厚」の「日」を「白」と記してある解答のあったことにも驚いた。

「暑」は小学3年生、「厚」は小学5年生の配当漢字である。

4 書き（記述）



30点満点で、最高点28点、最低点0点、平均点12.1点、正答率40.3%である。「中学生程度の漢字①」の「書き（記述）」（グラフ ①設問4）に比べると、高得点者は同じように少ないが、低得点者も減っていることが分かる。

誤答の中で多かったのは以下の通りである。

・「これが理科の試験の模範カイトウ（解答）だ」の「解」の誤答は56.6%

「刀」の1画目をはねていないもの	18.4%
「牛」を「午」としているもの	16.1%
「角」の4画目をはねていないもの	4.9%
「回」	4.5%
「牛」の1, 2画目がつながっているもの	3.7%
その他	7.9%
無解答	1.1%

・「ムボウ（無謀）な運転で事故を起こすな」の「謀」の誤答は76.4%

「媒」	9.7%	「望」	7.9%
「暴」	7.1%	「某」	2.6%
「防」	2.2%	その他	11.6%
表記ミス	4.9%	無解答	30.3%

・「日本酒のジョウゾウ（醸造）が始まる」の「醸」の誤答は90.3%

「酉」の4, 5画目が直線となっているもの	7.9%
「讓」	6.4%
「蒸」	5.2%

「浄」	2.2%
「六」が「大」となっているもの	2.2%
「六」の「ハ」が記されていないもの	1.9%
その他	26.6%
表記ミス	3.7%
無解答	34.1%

・「誇大モウソウ（妄想）にふけるのは危険だ」の「妄」の誤答は 74.5%

「盲」	5.2%	「忘」	3.0%
草冠+「忘」	1.9%	その他	7.5%
表記ミス	2.6%	無解答	54.3%

・「余興にもフルッテ（奮って）参加してください」の「奮って」の誤答は 86.9%

「振って」	13.1%	「振るって」	9.7%
「興って」	3.0%	その他	6.4%
表記ミス	14.2%	無解答	40.4%

・「彼はよく機転がキク（利く）男だ」の「利く」の誤答は 82.4%

「効く」	36.3%	「効」	1.9%
その他	4.9%	表記ミス	4.9%
無解答	34.5%		

さすがに「解」の無解答は 1.1%と少ないし、「回」という誤答も 4.5%である。しかし、それは言い換えると 56.6%の誤答のうち、47.0%もがこの漢字を大体は覚えていても、正確には覚えていないということである。

「無謀」の「謀」では、偏の違う「媒」が 9.7%、同じ音の「望」「暴」「某」「防」が 19.8%、無解答の割合は高く 30.3%を占めている。分からない漢字はとりあえず同じ音の知っている漢字を当てはめてみるのかもしれない。

「醸造」の「醸」では偏は違うが音は同じ「讓」が 6.4%、同じ音の「蒸」「浄」が 7.4%、表記ミスが 15.7%、その他が 26.6%、無解答が 34.1%を占めている。無解答の割合も高いが、その他の割合も高い。その他の割合が高いということは、分類しきれないほど、それぞれが様々な文字を記してみているということに他ならない。

「妄想」の「妄」では 74.5%の誤答のうち、54.3%が無解答である。それほど画数の多い難しい漢字というわけではないはずだが、他の同じ音の漢字さえ思いつかなかったようである。

「奮って」の無解答の割合も 40.4%と高い。「振って」「振るって」が 22.8%を占めているということは、「奮って参加」という意味もわからなかったのかもしれない。

「利く」では、「効く」「効」が 38.2%、無解答が 34.5%を占めている。特に難しい漢字でもなはずのこの漢字の無解答の割合の高さにも驚くが、漢字そのものの意味を理解していないという点も問題ではないだろうか。

その他にも、「採決」の「採」を「裁」「栽」「再」「済」と記したり、「細菌」を「最近」「菌」の「禾」を「木」「糸」と記したり、「図る」の「ツ」の部分「シ」と記している解答もあった。

「図」は小学2年生、「利」は小学4年生、「解」は小学5年生、「奮」「収」は小学6年生の配当漢字の配当漢字、「謀」「釀」「妄」は常用漢字である。

Ⅲ 考察

1 中学生程度の漢字①、②について

中学生程度の漢字①では、中学校の1年生程度の新出漢字と新出音訓を中心に、中学生程度の漢字②では、中学校3年間で学習する常用漢字を中心に出题し、高校入試レベルの漢字の出题はしていない。

まず「読み」についてである。「読み」の正答率は① 81.0%、② 70.8%と②の方が下がっているものの、まずまずのレベルと考えられる。おそらく新聞や雑誌を読む分には特に困ることはないだろう。ただ、②の方は無解答の割合が①より高い。語彙のレベルが上がると読めなくなるようだ。又、音読みより訓読みの方が苦手なようである。

次に「書き（選択し記述）」である。正答率は① 65.5%、② 68.0%と大差はない。ここでは、たとえ選択肢があったとしても、その漢字を意味も含めて正確にわかっていない場合には正解は選べない、ということが明らかとなった。このレベルの単語を知らないというのは心配である。更に問題なのは、漢字が記されているにも関わらず、自分の選んだ漢字を正確に書き写すことができないという事実である。記述の際の漢字ミスの多さには驚かされた。

次は「書き（誤りの抜き出しと訂正の記述）」である。正答率は① 35.0%、② 46.0%と②の方が少し高いが、両方とも非常に低い。①の正答率が低くなったのは、誤っていると考えて抜き出した漢字そのものが誤っていた、という解答が多かったためなのだが、どの漢字が誤っているかさえ分からないというのも困ったものである。ここで問題だと考えられるのは0点の割合の高さである。①、②とも10点満点の解答者がいるにも関わらず、①では9.0%、②ではなんと20.2%が0点なのである。漢字の覚え方自体に何らかの問題があるのかもしれない。

最後に「書き」である。正答率は① 37.0%、② 40.3%と両方とも非常に低い。30点満点はいないが、①は0点から26点まで、②は0点から28点まで幅広い分布となっていて漢字の習熟にばらつきがあることがわかる。①の方が正答率は少し低い、無解答の割合は②の方がずっと高い。②にはほとんど白紙という解答用紙もあった。①は一応書いてはあるが誤っているという解答が多かったのである。そして「読み」の場合と同様に、音より訓の方が苦手なようで、漢字はもちろんのこと送り仮名の誤りも多く、語彙レベルが上がると無解答の割合が高くなっている。

以上のように、漢字の習熟度にはかなりのばらつきがあることがわかった。更に、ただ単に漢字を知っているか知らないかというだけではなく、やはり語彙レベルの問題であると考えられる。

2 文字の乱れについて

まず、平仮名の乱れが気になる。「ら」と「ろ」の区別のつかないもの、「か」の3画目の記されていないもの、「き」が「き」「き」「き」「き」「き」、「さ」が「と」「と」、「け」が「け」「け」、「た」が「た」「た」「た」、「す」が「す」「す」「す」「す」、「ま」が「ま」「ま」「ま」「ま」のように、本来交わるべきところが交わっていないものや、交わるべきところを一筆書きのように記しているといった具合である。「お」「は」「ほ」「む」についても同様のことが言える。また「ん」は「レ」や「L」に見える文字もあった。本来2つ小さなテンを文字の右上に記すはずの濁点も、1つのテンしか記されていないなかったり、テンの位置が違っていることもあった。自分の覚え書きならともかく、漢字の読みの試験の際にこのようないい加減な平仮名を記して気にならないという点が非常に気になる。今回の調査では、片仮名については特に調査はしていない。しかし、漢字の「図」の「ツ」の部分「シ」と記されていた（中学生程度の漢字②）ことから、おそらく片仮名の記述にも乱れがあると考えられる。漢字を記す際に重要な部分となる片仮名が乱れていては、漢字の記述に乱れが生じるのは当然のことなのかもしれない。小学1年生で時間をかけて習ったはずの平仮名、片仮名といった基本が定着していないというのは困ったことではないのだろうか。

次に漢字である。今回の調査では中学生程度の漢字しか出題していない。漢字そのものは小学校での配当漢字も多く含まれている上に、高校入試レベルの漢字は出題していないのだから、漢字そのものの誤りももちろん深刻と言える。それぞれの漢字の持っている意味を知っていればあり得ない誤りも多い。しかし、それよりも気になるのは漢字を記す際のいい加減さである。漢字というのは角張った文字のはずなのに、その漢字に角がないというのはどういうことだろう。漢字の試験なのだから、トメ、ハネ、ハライがはっきりとわかるよう、楷書で普段より丁寧な気をつけて記すのが普通ではないのだろうか。それが出来ないのか、しないのか、わざわざこのような試験問題でする必要がないと考えているのか、それはわからない。しかし、こういったいい加減さは、日常生活一般にも影響を及ぼしているのではないかと他人事ながら心配になる。

IV 総合問題（期末試験）

総合問題では、中学生程度の漢字①、②で出題し誤答率の高かった問題と新規の問題とを出題してみた。すると、既出問題の誤答率は激減したものもあるのだが、新規問題に関しては以下のような結果となった。

1 既出問題

* 中学生程度の漢字①

読みの選択問題	「著した（あらわした）」	誤答 11.1%
読みの記述問題	「ヤオモテ（矢面）」	誤答 4.1%
書きの選択し記述する問題	「コウガク（後学）」	誤答 1.5%

ただし、漢字の表記ミスの21.8%を含めると、23.3%

書きの記述問題	「コドク（孤独）」の「孤」	誤答 75.5%
	「アタタマル（暖まる）」	誤答 24.5%

* 中学生程度の漢字②

読みの記述問題	「板塀（いたべい）」	誤答 7.7%
	「抄本（しょうほん）」	誤答 6.3%
書きの選択し記述する問題	「カキョウ（佳境）」	誤答 3.6%

ただし、漢字の表記ミスの 31.9%を含めると、35.7%

書きの記述問題	「カイトウ（解答）」の「解」	誤答 41.8%
	「モウソウ（妄想）」の「妄」	誤答 7.2%
	「キク（利く）」	誤答 18.6%

一度学習した漢字の習熟度はそれなりに高いことがこれで確認できた。しかし、読みに関しては飛躍的に誤答率が下がっているのだが、書きに関しては「孤独」84.0%→75.5%、「解答」56.6%→41.8%と、さほど誤答率が下がったとは言い難い。又、「後学」の選択は31.4%→1.5%と誤答率は激減しているのだが、記述ミスを含めると60.8%→23.3%となっている。「佳境」についても同様に、選択は40.8%→3.6%と誤答率は激減しているが、記述ミスを含めると63.3%→35.7%にとどまってしまっている。漢字自体はさほど難しいわけではない。そのため、かえっていい加減になってしまっているのかもしれない。

2 新規問題

* 中学生程度の漢字①

読みの記述問題

・「友はロンドンで客死（かくし）した」の「客死」の誤答は 52.1%		
「きゃくし」	43.7%	「かっし」 3.1%
その他	5.4%	

書きの記述問題

・「ユウフク（裕福）な家」の「裕」の誤答は 51.0%		
「ネ」と記したもの	26.1%	「優」 3.8%
「富」	3.4%	「豊」 2.7%
「有」	2.3%	その他 5.7%
無解答	6.9%	

* 中学生程度の漢字②

読みの記述問題

・「篤学（とくがく）の士として有名な主任教授」の「篤学」の誤答 77.4%		
「あつがく」	28.0%	「とうがく」 9.2%
「しょうがく」	6.9%	「ばがく」 5.0%

「せんがく」	3.1%	その他	21.1%
無解答	4.2%		

新規の問題に関しては、やはり誤答率が非常に高い。この結果から考えると、語彙力が非常に低いと言わざるを得ない。学習したことは身につけられるのだから、これまでの学習体験の中で語彙に関する知識を身につける機会が少なかったと考えた方がよいのだろう。しかし、中学生程度の漢字でこれほど手こずっているこの状況を放置しておいてよいものだろうか。何らかの方策が必要なのではないだろうか。

おわりに

中学生程度の漢字については、全体的に言えば、前回の調査結果とほぼ同等の結果が出た。このことから前回、今回の調査は、豊橋技術科学大学生について言えば、かなり蓋然性が高いと考えてよいと思う。

結論は、「語彙力」と「正確に書く能力」の不足である。この二つの能力は、別に考えなければならぬ。というのは、既に述べたように、総合問題を見る限り、一度学習した漢字、特に「読み」についての習熟度は非常に高いことが明らかとなったからである。おそらく今回の問題でも、本当は、一度も習っていない、あるいはこれまでの人生で一度も耳にしたことがない語彙はほとんどなかったはずである。つまり学生たちは忘れていただけなのだ。その大きな原因は、日常のコミュニケーションでそのような語彙を使用しないということだろう。そうであるならば、まず少なくとも、中学校から大学までの教育の場で、有効な教育システムを用意する必要があるのではないだろうか。普段使わないから忘れてしまうというのであれば、何度も反復して学習できるような教育システムがあってしかるべきである。それを行って初めて、中学生程度の漢字を含む語彙すら使用されないコミュニケーションがいかに貧弱で浅薄なものであるかを認識させることが出来るし、豊かなコミュニケーションの必要性和楽しさを実感させることもできるのではないだろうか。

もう一つの「正確に書く能力」も、当然この教育システムに含めて考えるべきであるが、問題の本質はまた別のところにある。総合問題の結果を見ても明らかなように、この点について言えば、何度反復しても結果は同じである。学生たちは、そもそも「正確に書く」ということに価値を認めないのであるから。しかしその一方で、少なくとも普段私が接している学生たちは、その価値や必要性を認めれば（納得すれば）、かなり真面目にそれに取り組む素直さも持っている。したがって、なぜ文字を正確に書かなければならないか、ということから初めて、「正確に」「きちんと」書くということの重要性を認識させられるような教育システム（内容）を用意すれば、効果があるはずである。もちろん小学校ではかなりきちんと教育されているはずであるので、その後をどうするかというのが重要な課題である。小学校で教えられたその価値観が、大学生にはよく納得されていないのであるから。

もちろんこれは、漢字や言葉の学習に限ったことではない。現代社会において、「正確に」「きちんと」という価値観は、かなり曖昧なものになってしまっている。そのような時代にあって、言語教育は大きな困難を伴うが、逆に、言語教育を通して、そのような価値観の再構築に向かうことができればよいと考えている。